

け聞いているのではなく、現に見ています。辻（那覇の遊廊）の女を連れて来て、戦争といながらこの連中は警戒していますよ」。

「普通の兵隊はどうだったか知らないが、仲伊保の尚家（旧藩主、旧侯爵家）の別荘は、将校用でした」。

「その経営者は、与那原の平蔵さん、あの方が慰安所のこととはよくわかるはずですよ。その慰安所はですな、軍から物資も与えて、民間の名義でやらしておったんです。そうして経営者は軍属です」。

「こっちに二か所あった。物資は軍から支給していた」。

「辻は、ほとんど軍の慰安所になっていたという話しでしたよ」。

「慰安婦の数はわからない」。

壕と村民の南部への避難行 「軍から、一週間以内に立ち退くようにという書面が来た。壕は軍がところから出なさいということも」。

「ほとんど南部に後退している。村で捕虜になった例は少ないです」。

「こっちは自然壕がないので、墓を壕にするほかはなかった」。

「面白いことには、残っている者はスパイということで脅しますか」。

「自然壕がなくて、壕はにわか造りで、掘る男手も少ない」。

「石部隊の隊長から、われわれは、もうあさっては第一線に行くのだから村民が残っているだけは南部へいっしょに下るようという公文が来たですよ。それで古波津村長は各壕を廻ってですね、ここはもう駄目だから、みんな南部へ行こうと行って、いっしょに行

ったわけです。行ったところは八重瀬ですよ。向こうの壕には、五、六十くらいまでは入れたです」。

「われわれは知念に行ったが、知念から具志頭に行くものもあるば、具志頭から知念に来るものもある」。

「友軍の兵隊が通っていたが、こっちは危険だといった。だから古波津村長は、わたしが安全なところを見つけて来るからあなたがたはここにいなさいと行って行かれたので、その日に亡くなられたんです。八重瀬までは行かれて時どき連絡を取っておられたが……」。

「病院壕は、翁長・幸地にもあったと思う。池田のアガリサーにも。棚原から二百メートルぐらいの距離、区域は翁長だが、棚原に近かった」。

「西原は、翁長・小波津・池田・棚原・幸地・上原、こういう部落しか壕はできないんですよ、横穴です。それで、他の部落の人たちは身寄りを求めて、壕のあるところへ、食糧も苦勞して運んだんです」。

「壕にいた時は、昼は艦砲が激しいし、夜は照明弾が上り通してあったが、それが止んだ時に水汲みや食糧取りに行った。そのため死んだ人が多い」。

#### 大城 康 秀（五十二歳） 村庶務主任

わたしは、自分の家族が艦砲で亡くなった点をちよっとお話いたします。と申しますのは、わたしは役所におった関係上、下る止むを得ない。それで村長に申し上げた。も早や爆死したものは止むを得んから、この手伝いして貰っている人びとに万一のことがあるっては大変だから、これで引きあげて、戦争が終ってから遺骨を取るようにした方がいいからというふうにみんなに断って引きあげたわけ。それで終戦後役所に来てから、掘って見ましたが、全部まだ遺骨になっていませんでしたので、出さないで、そこにおっただけ合同で焼いて、遺骨にしてから分けて持って行ったわけです。それから結婚していた娘のことですが、娘と嫁はわれわれより先に、真栄平に行っていました。真栄平の丘で娘は艦砲に当って死んだと、嫁に知らされました。戦争が終ってから遺骨取りに行きました。行って見たら、この子の着物と傘と棒ですね、それを隣りの兄さんが持って来たので、嫁はそれは自分のものだといって、そこに遺骨があるにちがいないといって、行って見たら、余所の人が持って行ってないんですよ、わざわざ行ったのに、自分の家族の遺骨がなくなっているのは何ともいえない淋しい気持ちでした。

島尻の方へ下って、八重瀬岳へ行きましたが、人員は五、六十名で、村長さんが軍の部隊長と話し合って、交代して壕に入れて貰いました。しかしそこでやられましてね、それから後は、昼は隠れて、夜は歩き通しで、それで捕虜になったのが、港川ですね。そこでは前村長の大城雄勝さんもいっしょで、カクイチさんもいっしょでしたが、アメリカに、「君等は明日の十時に連れに来るから、そこから動かないようにしなさい」ということでしたよ。それをアメリカから村長に話したわけです。それでみんなそのまま待つていたわけです。ところが前村長とわたしは、兵事関係もある

ことだし、捕虜になると、真っ先にわたしたち二人を役所につれて行って、役所の壕から、在郷軍人名簿や役所の機密書類をさがされた場合は、大変なことになるからといってですね、二人は夜中からまた逃げたわけです、そこから。それからが二人は非常に苦しみました。

それから二、三日間を置いてからですね、船からも、もう戦争は終っておるから、裸になって壕から出て来い、とスピーカーで呼んでいたんですよ。それでも気にしませんでした、もう止むを得んからということ、そこから飛び出してですね、行って見たら戦車なんかも並んでですね、また捕虜されたのも今の名城ビーチに収容されたわけです。そしてわたしは年齢の関係で、その時五十三歳(数え)であったので、前村長は若かったから別べつに分かれさせられ、越来へ送られてあっちに一時行ってですね、今度はまたそこから久志へ。

長男は郵便局から徴用されて山口県へ行っていました。次男は現役で満州へ行っておりました。三男が防衛召集されて戦死しましたが、これの戦死は早かったようです。長女は防衛召集(軍隊に同行し、弾薬運びなどの意)されまして、最初はどくなったかわからなかったんです。三女はですね、他に嫁入りさせておりました。妊娠しておりましたが、大里でやられました。もう妊娠九か月になっていました。

墓の中で全滅したわたしの家族はですね、家内と七つと五つの子供二人、それに長男の嫁さん、孫が七つになっておりました。嫁さんは二十いくつでしたかな、妻はわたしとは八つか九つの年下で妊娠して悪化しまして、繁多川の壕に避難していましたが、まあ昼中、夜も敵の対空監視と、首里の司令部からの情報を蒐集して避難民の方へ情報を聞かしていました。そういう対空監視とそういう任務で住民の治安維持をしていましたが、戦争が悪化してから繁多川の部落民がですね、お母さんと四つくらいの子供でしたがね、飯炊きするということで艦砲がバット来てですね、そのお母さんは顔面、顎からほとんどはなれておるんです。そして子供は胸部の方に盲貫銃創ですね、その時は子供も生きておるし、お母さんも意識はあったんです。それで壕に担架で担いで来て、治療は大宜味朝計さんですね、治療はしたんだが、もう手当のしようもなかったんですね。大きな怪我でした。そのお母さんは自分の怪我の痛さは知らん、意識もあったのだが、子供の名前ばかりいっつづけておったんです。そうして治療はしておったんだが、あれから間もなく亡くなったと思っんです。

それから、うちの隣りの壕は、りっぱなお墓だったので、食糧も相当に沢山詰めてあったが、そこに宜野湾村か、浦添村あたりから来た子供がいた。この子供等は、姉さんが六年生十三歳くらいの子でしょう、それから生れて四か月くらいの子供を負んぶして、三つ

賑八か月になっておりました。一番小さいのが五歳ですね。帰って山原から野嵩に来た時、長男も次男も帰って来ないものと思っですね、生きているのと、死ぬのとどれがいいかと思っのですが、しかし遺骨が散らばっておるでしょう、自分が生き残っていないと、遺骨を集めることができないと思っですね、生きておっったんですよ。

池田でも妻子が死ぬし、真栄平でも嫁と孫と次女が死にました。大里では三女が死にました。しかし長女は助かっていまして、帰って来ましたので二人でおりました。そうしたら、死んだだろうとあきらめていた長男と、満州へ召集されていた次男の二人は、戦死しないで帰って来ました。

運玉(丘)に近いところに樋川原といってですね、そこは避難民が相当に亡くなっていますよ。

わたしの家内や子供たちがやられた墓にいっしょに入っっていられた、平安座から来ていられた先生は何という姓名であられたですかね。わたしの姉さんといっしょに、わたしのところへ来ていられた墓の主は、安谷屋エイコウという方ですが、わたしの姉さんと安谷屋さんは、わたしのところから帰って行ったら、家族は全滅していたわけです。わたしの姉さんと安谷屋さんも、わたしたちのところへおつかいに来られなかったら、みんなと同じようにやられたんですね。

#### 大城 政吉(三十歳) 警察官

わたしは当時那覇警察署に勤務していました。署長が具志堅宗精

か四つくらいの子の手を取って、わたしのところへ来ていた。「お母さんは」と訊いたら、貯金通帳と配給台帳と食糧を忘れているから取って来るといって、お母さんは行ったというが、いつまで待っても帰って来ないんですな。そうしてその子供たちに配給の粉ミルクがあったんです。それを水に溶かして与え、壕におりましたが、その子供たちが米軍の砲火に殺されなくても、果して生きているか、恐らくは、生命を全うし得なかったのではないのでしょうか。そういうことから見ても戦争というものは、罪のない子供たちをあんな痛ましい目に合した。そういう例はあっちこっちに見られたのですがね。昼中は、まあ艦砲とか、それから空爆ですね、もう隙き間がないほどでしたよ。

繁多川でも戦況はますます悪化してですね、対空監視をしていた国場セイゼン巡査が機銃で足をやられて、それから南部に下るように命令が出ました。それで真っ先に負傷した職員を連れて行かねばならないので、わたし等四名で国場巡査を担いで、真玉橋を渡ろうとしたら、その橋は空爆で、ほとんどやられて、ようやく二人くらい歩ける程度でした。そこを四名で担いで行こうとしたら、上空にトンボですすよね。羽を動かしておると思ったら、ちよと真玉橋渡ったところで、艦砲と低空で空爆ですね、バンバンです。ようやく国場巡査を避難先の壕までつれて助けたんですが、その巡査は今も元気です。

それから隣りの日本軍の海上特攻隊ですね。丸木船で火薬をつめて、敵艦目がけて体当りするその特攻隊がですね、明日は未明に敵艦目がけて決行するといっって、演芸会ですかね、軍歌を歌って、さ

んさん飲んでですね、もう明日は死ぬか生きるかわかるとやっていたが、軍歌は、同期の桜みたいなのでした。後で話をきいたら、一つしか行かなかったそうですなあ、途中で敵艦に近寄れなかったそうです。何とかかんとかいつている情報をききましたがあね、全部玉砕したでしょうね。真玉橋の近く、真玉橋から部落へ向かって、右がわに大きな壕があったんです、今も残ってありますよ。

あれから下って阿波根(旧兼城村)の壕にもおって、向こうからまた伊敷のトドロキガマという大きな自然壕があるんですがそこへ行った。その壕の中には川も流れています。そこから水を汲んで飲んでいましたが、あそこでは署長の具志堅宗精さん、大城警部、山川泰邦さんもしょでした。警察の本部の方も相当おりました。

その壕は可なり深い壕でしたが、もう出ようという時には、敵に包囲されて全然出られない、食糧は持っております。米です、それで二週間という間、生米をカジっていました。

それからどうしても逃げ穴をつくって、敵前突破をしなければいけないということで、壕を掘ろうとしたら爆薬ですかね、ボンボン投げ込まれて、照屋警部が顔面に怪我して、終戦後亡くなりましたがあね、それからもうどんどん二世とか、何とか、戦争は終わったから出てこい、でてこいとって、マイクで呼ぶが、また友軍の兵隊は、出たら必ずやられるから出るなという。わたしは手榴弾を持っておりましたよ、もしもの時はやるといって。もう捕虜なつてもいいからとお互同僚の気持ちですね。兵隊は、出たら、いっしょに協力してくれといっていました、もう死んでもいいという気持ちで、梯子で出たですがね、その時は別に兵隊も危害を加えなかった

察の幹部の方はほとんどいっしょですね。

アメリカはCPに対しては、住民の治安維持を考えて、大変協力を求めておりました。各部落、CP(警察)というのがありましたね。あの当時は向こうの言いなりで、一巡査が署長したのもおりましたよ。わたしは古知屋でCPをやりました。赤いヘルメット被ってですね、配給を貰ってやっておりました。

家族は、警察官は特別に本土へ疎開させておりました。ちようど三つくらいになりましたかな、あしたは船が出るという時に、夜どうし泣いて、絶対どこへも行かないというので、うちに帰ったら、村の方で国頭に疎開させて貰って、幸いに全部助かったですよ。お母さんと妻と妹と五名、全部元気ですよ。まあ何といっても戦争というのはみじめですね。何でもない人も殺し合いですから、助けようと思っても自分もいっしょですからどうにもなりません。

## 大城 孝 敏(四十九歳) 西原村収入役

わたしが感じたことは、戦争というものはほんとにこんなものかなと思っただけ、島尻行つてからですな。母親が死んで乳呑み児がおっぱいにかじりついてですよ、そして泣きおる姿を見たらですな、戦争というものはこんなものかなとつくづく考えておったところ、この子供までまたやられたんですから、それでわれわれの命も、今か今かで心配しておったわけです。場所は名城です。まだ若い母親でした。どこの人かわかからんですがね、仰向けになっている

んです。ようやく壕から出て、そこで集まって捕虜になったんですね。豊見城村の阿波根(座安・伊良波の記憶違いではないか)か、あそこに、一か所に集めて、あっち行ったら避難民が相当集まっております。

あの壕におって、生きるか、死ぬかの辛さですね、こんな戦争いうものは、こんなみじめなものかという、あの状況はちよつとでは言い現わすことはできませんね。

生米もにがくてですね、中には負傷した子供もおるし、精神病者も入っておるしね。同じ兄弟でも、黄燐弾というかね、あれで顔を怪我してね、水を飲ましてくれとわめくんですが、兄弟でも見てくれない、助けようとしな、兄弟も自分のことでもいいいばいだからね。

そうして、アメリカの兵隊が短刀を持って来たんです。それでこれは最後だと思いました。雑語を少しくれて、煙草をくれたんです。それから、隣りに壕を掘れというんですよ。それでわたしは、殺して埋めるんだなと思いました。そうしたら、雑語の空嚮を集めさせてこれに入れるように言ったんです。それで殺すのではないんだなと思っただけです。

それから、阿波根の收容所には四、五日間くらいいて、北中城の喜舎場へ移されて、宜野座村(旧金武村)の古知屋開墾へ連れられて行きました。あの時は、西平宗セイさんが警察部長でした。それから新垣重敏が警察の何かでした。

トドロキガマでは一応解散しましたので、敵前突破を企てて、亡くなった人もあるし、最後までおって助かったのもおるし、今の警

がちよつと歩いたら、その子供がやられたんです。われわれもそこにいたらやられていたでしょうね、人間の運というのは珍しいですよ、ちよつと動いただけで助かります。その時分からは、機銃ではやられなかったですよ。遠いところから撃つたのが恐かったんですよ。避難民には機銃はあんまりやらなかったです。

わたしが一番苦しかったというのは、わたしは、糸数(玉城村)ですな。あれを通過して、具志頭へ行って、それから名城へ行ってですな、名城ビーチのある部落ですな、あそこで壕をさがしてちよつと入っておったんですが、あの当時、うちの娘もつれておったんですよ。その娘が四十度ぐらの熱を出しておったんです。それで四十度の熱は非常に苦しい熱だったんですが、そういう時に、軍から追い出されてしまったんです。これが原因で娘が死んだわけです。それで、その当時は何とも言えない苦しさだったんです。四十度という熱の出ている娘をつれておるのに、いくらお願いしても、一日や二日ぐらい置いて貰えなかつたということが情ないことと思つて、それでわたしの一番苦しいのはその時です。四十度の熱を出しておる娘だが、後二、三日もここにいて治療すれば癒えるという気持ちを持っておったんですから、そこを追い出されて、それが原因で死んだんですから、いつまでも忘れることができないわけです。場所は、名城部落の東がわです。そのちよつとした壕ですよ。二日ぐらい置いてくれと頼んだが、どうしてもきかない。それでわたしは五名つれておったんです。家内と子供四人ですが、それが原因で二人亡くなりました。

この娘は、結婚させてありましたがね、夫は兵隊で、輜重隊の伍

長ですが、これが召集されて、誰もいないものだからわたしがつれておったんです。夫の方も戦死です。娘はまだ子供はできていません、年がまだ二十でしたから。

もう一人亡くなったのは家内です。名城で死んだのではないんです。伊良波に收容されて、宜野湾へ行って、そこですぐ死んだんです、栄養失調ですな。

わたしは伊良波で別箇にされたんです。男は引き離されたんですから。捕虜なつたのは、六月の二十日頃ですな。

新垣 正義(三十五歳) 海軍

わたしはセレベスに無敵上陸して、戦争中はあまり苦労はしませんでしたかね。

沖繩の戦況は、わたしは司令部にいまして報道係りがおつて新聞も出しておりましたので、戦況が悪くなっていることもわかりました。

最後に戦争の情報が、沖繩は玉砕というので、沖繩は人間がひとりも残っていないものと思っておりました。

いよいよ日本の敗戦になりましたので、われわれは濠州軍の支配を受けて、一年くらいして、それから復員しました。

沖繩にいいよ近づいたら、首里あたりも真白で、地形がすっかり変っておるんですね。家が一軒もない。那覇の港に入っても、人間一人も見えない。もう人間は一人もいないんだな、と思いましたが。

上原座談会(西原村)

宮城 聡

時 一九六九年十一月二十日

場所 宇上原 公民館

氏 名 現 住 所

稲 福 かまど  
屋 良 ツル  
大 城 カメ  
屋 良 ウト  
喜 納 ウト  
屋 良 ウシ  
喜 納 ウト  
喜 納 信 政



### 解説

出席者で一番若い方が現在、満七十歳で、戦争を生き抜かれた高齢者ばかりだった。満で八十二歳、七十九歳二人、七十七歳、七十六歳、七十五歳といった方がたであった。死線を越えて、また酷い負傷を負いながら、上記のように高齢を全うしてられる方がたばかりだったか、これは特異な例として、よかったと思う。

爆風を受けて、耳が聞こえないで、話しを巧く進めることができないうらみはあったが、しかし、戦争当時、五十代の主婦の戦争体

それから久場崎(中城村)に来てですね、どこかも、真白で、これはほんとに鉄の暴風だったな、そうしてわれわれの想像以上だったな、と思ったんですが、戦争の悲惨なことに心ひかれたんですね。われわれは向こうで戦争の危険に参加したことはないんです。それで沖繩戦は沖繩の住民が軍隊といっしょになつてたかたこともわかつたんです。

それで戦軍がいくらでも掘坐しておるんですね、米軍の戦軍が。この辺の山野を歩き廻つて見ると、日本軍の鉄兜とか靴とかが散乱しておるんですね、これは淋しかったな、非常に犠牲者が多かつたなとはじめてわかつたわけですがね。

それからいろいろの話を聞いたんですが、戦争が非常に激しかったということ。そうして日本の軍隊が沖繩の住民に対して圧力を加えたとか、虐待をしたという話が大きな話題になつておつたんですがね。まあそれはわれわれ軍隊におつて成程一方的にそうも必ずしも取れなかつたんですがね、敗戦だからそうもなつたんだらうと。それからスパイ問題について、まあそれは、とにかく何ですな、非戦闘員と歩いておるとですね、敵味方ではあつても混同するんですね、接触する、まあスパイというものは味方でも、猜疑心を起す。つまり捕虜を取られるとですね、この辺に残つておる人はみんな日本軍がスパイと見なしたとかいう話、それはですね、アメリカに情報取られるんです。どこにどうという部隊がおるとかね、隊はどこへ行ったとかね、あれは止むを得ないんですね、戦争するんですね、兵隊は非常に気が立つしね。

験は相当にはつきり、簡明に記録された。

戦争による負傷者の後遺症やその酷い疵跡の方は、他の座談会でも、あちこちで見られたが、現区長の喜納さんと、屋良ウシさんの負傷には驚かざるを得なかつた。

上原の場合は、高齢者の戦争犠牲(負傷)だけに、日本政府が、それ等の人に、何等かの処置が取られてないのを不満に思い、それを期待しているような気分が、ほとんどの方に見られた。

この戦争記録篇の座談会を、戦災身体の調査とさえ思つてられる方もあるように推察された。

上原は、中城村の南上原の南端で、一日に朝夕二回はバスが通ることであつたが、座談会を終えた編集所の上原所員とわたくしたち二人は、二キロメートルに近い字棚原まで、乗りものがないので、歩くことにした。

すると、たまたま、作業から帰るピックアップが、宜野湾へ行くという。宜野湾へ行けば、バスやタクシ一の便が得られると思ひ、ヒッチハイクを頼んで乗せて貰つた。しかし驚いたことには、通る道が浮世離れの人里離れた未知の山間であつた。谷越え堀り割りを越えて、電燈の灯る宜野湾街路に辿りつくことができた。その山間の道が、今日の座談会をより悲しく体にしみる感じだった。

喜 納 信 政(五十三歳) 戦争協力

わたしは上原を家内よりも一足先に立ちまして池田の墓に来ていました。池田で落ち合うように話し合つてありましたので、そこで